



伊吹泰郎  
挿絵／藍沢ちひろ

# 保養士の の

優しい顔と夜の顔

# 秘 蜜

リアルドリーム文庫

試し読み版

プロローグ	.....	4
第一章	誕生パーティーの後に	12
第二章	思いがけない頼み	64
第三章	喘ぎ声×2	120
第四章	香菜の友達	173
第五章	二人で競争!	229
エピローグ	.....	272



---

## 登場人物

Characters

---

### 岡本 香菜

(おかもと かな)

『にじのゆめ保育園』に勤務する保育士。可愛らしい顔立ちで体型はグラマラス。包容力もあり、料理もできるしっかり者だが、反面、自分を過小評価する傾向がある。恭介にとっての憧れの女性。

### 佐伯 恭介

(さえき きょうすけ)

理工学部の大学生。見た目は平凡だが人の好い性格。年の離れた腹違いの弟が通う『にじのゆめ保育園』で香菜と出会い、恋に落ちる。

---

## プロローグ

京大<sup>きやうだ</sup>大学の理工学部に通う二年生、佐伯恭介<sup>さへききやうすけ</sup>は現在の父親と血の繋がりが無い。

彼が高校生の時に、母が再婚したのだ。

翌年には腹違いの弟<sup>まもる</sup>の護<sup>まも</sup>りが誕生。

いうまでもなく、育児は相当な体力と気力が必要になる。

彼が受験で苦戦していた頃は、母親も、新しい父親も、家にいる時間を多く取ってくれた。だが最近は揃って出張が多く、半月近く帰ってこない状況すらザラだった。

今日だって、護を保育園——にじのゆめ保育園という名前だ——へ迎えに行くのは、恭介の役目。

——お前も大変だなあ。

大学の友人達には同情されてしまう。

確かにサークル活動へ参加する余裕すら持てず、彼女いない歴が年齢とイコールになっっているものの、恭介はそれなりに割り切っていた。

自分が幼い頃は、母と祖父母が面倒を見てくれた訳だし。

両親が仕事を頑張っているからこそ、安定した生活を送れる訳だし。

何より、腹違いの弟は無邪気に信頼を寄せてくる。あの幼い笑顔を裏切るなんて、とてもできない。

理不尽に泣き喚わめかれたりと、イラツとくることも時にはあった。

だが、恭介は平凡な外見ながら、弟想いの善良な青年に育っていた。加えて友人達には、こう力説する。

『俺には役得もあるんだよ。護を見てくれるヒヨコ組の保育士さんがさ、すっごい美人で優しくて、超理想のタイプなんだ！』

彼の顔に浮かぶ満面の笑みを見ると、友人は生暖かい雰囲気となるのが常だった。

中には『そこまで言うなら、遊びに誘ってみれば良いのに』と返す者もいるが、恭介は照れ笑いと共に目を泳がせてしまう。

お人好しの青年は、今時珍しいぐらい純情でもあるのだ。

この日、恭介がにじのゆめ保育園へ着いたのは、秋の初めの日差しが、かなり西に傾いてからだった。

保育園は水色の屋根が特徴的な平屋造りで、複数の遊具が置かれた庭は、大勢の子

供が駆けつこをするのに十分な広さを確保している。

開かれた鉄製の門を抜けて、恭介が敷地へ入ると、すかさずヒヨコ組から護が飛び出してきた。

「兄ちゃ——ん！」

前のめりで小さな足をチョコチョコ動かす走り方は、かなりバランスが悪くて、派手に転んでしまいそう。

しかし、恭介は敢えてその場でしゃがみ、弟が飛びつくのを待った。体当たりじみた勢いをキャッチしたら、父親譲りの髪質を撫でてやる。

「兄ちゃんっ！ やつと来た！」

「ごめんな、遅くなっちゃったよ」

その頭上から、癒やし系の声をかけられた。

「護君のお兄さん、毎日お疲れ様です」

「は、はいっ」

弾かれるように見れば、一人の女性が上体を屈めて微笑んでいる。

「今日も大学から来たんですか？」

「え、ええ、ええっ。そうなんです。研究用の機材の片付けが長引いてしまっ

「大変ですね。でも……ふふっ、だんだん専門家らしい顔になってきたみたいですよ?」

「俺なんてまだまだですよ。岡本先生こそ、いつも護をありがとうございます。今日はどうでした? 先生を困らせませんでしたか?」

「安心してください。護君は今日も元気で良い子でした。……ねっ、護君」  
「うん!」

果たして会話の意味が分かっているのか。護は『先生』に素直な笑顔を返す。  
この女性こそ、恭介にとって憧れの人。ヒョコ組を担当する保育士の、岡本香菜だつた。

面と向かって聞いたことはないものの、歳はおそらく二十四から七の間ぐらい。  
(素敵だよなあ、岡本先生……)

表面上は自然体を装えるものの、恭介は内心、舞い上がりそうなのを我慢していた。香菜の瞳は黒目がちで、子供好きの優しい人柄をはつきり宿す。と同時に、知的な輝きもあった。その二面性が、純情な青年にとって、一番のチャームポイントだ。

フンワリした黒髪は、清潔感のあるショートボブにまとめられ、彼女の持ち味とマッチ。

一方、艶やかで程よい厚みの唇には、大人らしい色つぽさも見え隠れする。

だが、否応なしに存在感を発揮するのは、バストの大きさだろう。

愛らしいヒヨコが刺しゅうされたチェック模様のエプロンは、いかにも実用的で丈夫そう。なのに、胸元の豊満さをまるで抑えきれず、二つ並んだ小山型に、たっぷり盛り上がっている。

異性との経験に乏しい恭介では、グラビアアイドルの公式データと比較する他ないが、最低でもGカップぐらいありそうだ。まして、子供へ視線を合わせて身を傾けると、ボリユームはさらに際立つ。

(……っ！)

不躰ぶしつけになりそうな視線へ、どうにかブレーキをかける恭介。

バストと対照的に、エプロンの紐が結ばれる腰回りは、シュッと引き締まっている。さらに下ると、ヒップはいわゆる安産型で――。

駄目だ。どこを見ても、香菜の身体には男心を引きつけられる。

「兄ちゃん、先生よわいんだよお」

「ん？ 弱いつて何が？」

急に弟が言い出したおかげで、恭介は煩惱を追い払えた。



そこで脇から香菜が補足してくれる。

「今日はお迎えを待っている間、あっち向いてほいをやっていたんです。護君の大勝利でした」

「兄ちゃん、見ててっ」

兄から離れた護は、香菜へ身体ごと向き直り、

「先生、も一回！」

「うん、もう一回ね」

香菜も完全にしゃがんで、グーにした片手を差し出す。

「じゃーんけーん」「ぼんっ」

香菜はグーのまま、護はパーを出した。

すかさず護が人差し指を伸ばす。とはいえ、その先端はすでに上を向きかけていた。

「あっちむいてー、ほいっ」

舌足らずな掛け声に合わせて、香菜がわざと上を見る。

「ほら、兄ちゃんっ。かったー！」

「そっか。護は強いなあ」

正直、もつとこんな風にはのぼのと過ごしていたかった。

だが、あまり香菜を引き留めたら申し訳ない。きつと他にも仕事があるはずだ。

「護、そろそろ帰ろう。続きは家で兄ちゃんがしてやるよ」

言いながら立ち上がると、右手首に引っかけていたビニール袋が、微かにカサツと音を立てた。中身はさつきスーパで買った中華風の総菜が数種類。

その袋へ香菜の目が向けられた。

「もしかして、今夜のおかずですか？」

保育士をやっていると、栄養バランスへも敏感になるらしい。

恭介は後ろめたさを感じつつ頷いた。

「護は育ち盛りだし、もつとちゃんとしたものを作ってやる方が良いと、分かってはいるんですが……」

忙しいと、どうしても手抜きになってしまう。

ともかく、いくら言葉を重ねても、弁解にしかならなかった。

香菜との間に気まずい空気が漂いかけ——やがて、彼女は思い切ったように聞いてきた。

「もしご迷惑でなければ、次の土曜日は、私が晩御飯を作りましょうか？」

「えっ？ いいんですか!!」

恭介は反射的に提案へ飛びつきたくなる。が、すんでのところで踏みとどまった。「や、いえ、悪いですよ。岡本先生こそ、こんな時間まで仕事してて、俺より毎日忙しいじゃないですかっ」

「大丈夫です。土曜日は私も早く帰れますし、護君達と食べれば、家で料理するのと一緒です。でも、一つの家だけ特別扱いしているのがバレたら怒られてしまうので、他の保護者方や先生には秘密にしてくださいね？」

セリフの後半、真面目に声を潜める姿が愛らしい。

恭介の良識はあっけなく吹き散らされてしまい、

「わ、分かりました……っ。よろしくお願ひしますっ」  
最敬礼の角度で、彼は頭を下げていた。

## 第一章 誕生パーティーの後で

土曜日の夕方、香菜は本当に家へ来てくれた。

恭介と護が住んでいるのは、にじのゆめ保育園から徒歩で十分足らずの位置に建つマンションだ。

そのキッチンで今、香菜がテキパキと料理している。

フライパンで肉を焼く音と、香ばしくて美味そうな匂い。

世話になりっぱなしでは悪いので、恭介も手伝いを申し出たのだが、丁重に断られてしまった。

「お兄さんは護君が退屈しないように、遊んであげてください」

確かに彼女の隣で素人同然の恭介がオロオロしていたら、邪魔にしかならない。というわけで、彼は弟と一緒に子供番組を見ている。

「あれがねー、アルフレドー」

「アルフレドかあ。強くてカッコいいな」

「うんっ、カッコいい！」

しばしば、護は好きなキャラクターを紹介したがる。その聞き役になるだけでも、結構満足してくれるのだ。

やがて香菜に呼ばれて、二人でキッチン兼ダイニングへ行けば、皿の上ではハンバーグと温野菜が、カップの中では黄色いポタージュが、ホカホカと湯気を立てていた。「お……おおっ」

仕事一筋の両親も、決して料理上手ではない。佐伯家のテーブルにここまで立派な晩御飯が並ぶなど、恭介にとっても初めてで、咄嗟とっさに感想が出なかった。

逆に護はストレートだ。恭介のシャツの裾を引きながら、歓声を上げる。

「兄ちゃん、ハンバグー！」

「あ、そうだな、うん。……岡本先生、何てお礼を言ったらいいのか……ありがとうございますっ」

やつと我に返って礼を言えば、香菜はエプロンを外しつつ苦笑した。

「まだ味も確かめていないのに、気が早いですよ。……護君、お兄さんと手を洗ってきてね？」

「はい！」

はしゃぐ弟に引つ張られつつ、恭介は洗面所で手を洗い、ダイニングへ戻る。

香菜と向かい合い、護とは横に並ぶ形で椅子に座つたら、いただきますと挨拶だ。食べてみれば、ハンバーグは絶品だった。表面はカリッと香ばしく、中は熱々でジューシー。

ソースはどう仕上げたのか、子供が食べやすいマイルドな甘辛さの奥に、複雑なコクが潜む。もはや冷凍食品どころか、近場のレストランでも満足できなくなりそうだ。せつかく香菜と話をするチャンスなのに、恭介は食事へ夢中になってしまふ。

やがて全ての器を空にすると、深い満足感、さらに終わってしまったという一抹の寂しさが、彼の胸中で混じり合つた。

「ご馳走様でした、岡本先生。とにかく……とにかく素晴らしかったです！ 護がニンジンを残さなかったのも初めてですよ。全部、先生のおかげですっ」

「そんなことありません。護君、最初はニンジンを避けていたじゃないですか。お兄さんが美味しそうに食べるのが、お手本になったんですよ」

「俺、そんなにはしゃいでました？」

香菜からは園児並みに幼く見えたのかもしれない。そう思うと顔が熱くなる。しかし、彼女は純粹に嬉しそう。

「お兄さんの食べ方、素敵でしたよ。私も作つた甲斐がありました」

面と向かつての微笑に、恭介は別の意味でも赤面させられる。

その甘くなりかけの空気を、護が無邪気に消し飛ばした。

「先生、明日もごはん作ってー！」

遠慮ないおねだりに、香菜も微笑を見せた。

「うーん、毎日は無理かなあ。でも、また来るね。……約束」

言って、小指を差し出す彼女。そこへ護もあどけなく指を絡めて、

「ゆーびきーりげんまん、嘘吐いたら針千本飲ーます」

二人の手が離れるのを待って、恭介は念のために確認してみた。

「そんなに甘えてしまっていていいんですか？」

「大勢で食事すると、私も楽しいんです。これはギブアンドテイクですよ」

「そういうことなら……お世話になります」

こちらのテイクが大きすぎる気もするが、まあ、お礼の仕方は後で考えよう。と、護が袖を掴んでくる。

「兄ちゃん、兄ちゃん」

「ん？」

「兄ちゃんと先生、けっこんするの？」

「ぶほっ?!」「っ?!」

完全な不意打ちに、恭介どころか、香菜まで体勢を崩しかける。

「し、し、しないって! どうしてそう思ったんだっ?」

「だって、サクヤちゃんが言ってたよ。仲良しの二人は『こいびと』になって、それからけっこうんするんだって」

「サクヤちゃんって、同じヒヨコ組の子だっけ?」

「うん! ぼくもサクヤちゃんと『こいびと』になったの!」

「そ、それは良かったな……」

そう言うのがやつとだ。チラッと香菜を窺<sup>うかが</sup>うと、彼女も端整な顔立ちをほんのり赤くしていた。

「あ、あははは……子供は思いがけないことを言いますねっ」

恭介はおおげさに笑ってみせる。

だが、続く香菜の言葉はどこか妙だった。

「……そうですね。私が恋人じゃあ、絶対にお兄さんへ迷惑をかけてしまいますし」  
やけに後ろ向き。

とはいえ、ここでサラッと的確な返しをできるほど、恭介は器用ではない。



結局、話はうやむやのうちに終わってしまった。

それから二か月ほどが過ぎた。

「お兄さん、お誕生日おめでとうございます」

「おめでとーっ」

恭介は二十歳の誕生日を迎え、土曜日の夜、香菜がお祝いに来てくれた。

テーブルの中央には、香菜の買ってきたショートケーキが、ズシッと一ホール。さらに各々の前へジュースのグラスが置いてある。

憧れの女性と可愛い弟、二人と交わす乾杯に、恭介は涙腺が緩みそうだ。そんな兄の鼻先へ、護が花の形の折り紙を突き出してくる。

「これ、あげる！」

見れば、折り紙にはリボンが付き、首から下げられるようになっていた。

「上手に出来てるなあ。ありがとう、護」

外へ着けていくのは無理だが、壊さないようにしつかり保管しようと思う。

続けて、香菜からも小さくて細長い箱を手渡された。

「良かったらこれ、使ってください」

「岡本先生まですみませんっ。……中を見ていいですか？」

「はい、どうぞ」

了解をもらえたので、丁寧に包装紙を剥がす。さらに箱を開けると、洗練されたデザインのボールペンが出てきた。

「最高ですっ。大事に使わせてもらいますよっ」

青年の喜びようで、香菜もホッとしたようだ。

そのリラックステキな笑顔の前に、恭介は珍しく積極的に出たくなる。

「せっかいですから、岡本先生のお勧めのバーとかも教えてくれませんか？ 俺、お酒に興味があったんです」

すでに何度も家へ来てもらっているし、厚かましい頼みでもないだろう。

と思っていたのだが。

いきなり香菜が笑顔のまま固まった。

それは晴れの席の空気まで凍り付かせるほどの、露骨な反応だった。

「えっと……岡本先生？」

恭介が呼ぶと、香菜はぎこちなく明後日あさっての方向を向く。

「や、やめておきましょう。私がお酒を飲むと、絶対に迷惑をかけてしまいますから

……

「迷惑……ですか？」

それは初めて料理をご馳走になった日から、恭介の脳裏に残っている単語だった。

——私が恋人じゃあ、絶対にお兄さんへ迷惑をかけてしまいますし——

もしかしたら、前に酒の席で大失敗したのかもしれない。

それが彼女のトラウマになっている、とか。

(……想像できないなあ。というか、岡本先生ほど素敵な人なら、ちょっとぐらいハメを外したって、可愛げのうちだと思うけど……)

そう思う恭介だが、しつこく食い下がっては失礼だろう。

当然といえば当然ながら。

香菜には恭介の知らない面が、まだまだ沢山あるようだ。

ささやかなパーティーは、護がおねむになったことで、二時間もしないうちにお開きとなった。

「……しようがないな、護は。風呂にも入らないで」

どうにか歯磨きだけはさせたのだが——。

弟を部屋のベッドへ寝かせつつ、恭介はひとりごちる。ただし、ぼやくというよりも、幸せを噛み締める声色だ。

香菜の方は食器の片付けをしてくれていた。

このシチュエーション、まるで新婚夫婦みたいではないか。

弟へ布団をかけ終えて、青年がキッチンへ戻れば、ちょうど食器乾燥機のスイッチが入ったところ。

「今日もありがとうございます」

もはや何度目か分からない感謝の言葉と共に、恭介は二人分のジュースをグラスへ注ぐ。そうして、香菜と差し向かいで座り直した。

いつもは護が一緒なので、一対一で話をするのは、これが初めてだ。

そう思うと、最近では薄れていた緊張感が、俄然がぜん強まる。

本日の香菜の装いは、クリーム色のセーターに茶色のロングスカート。いかにも秋の終わりらしい、シックな組み合わせである。

(落ち着け、落ち着け……)

恭介は己に言い聞かせた。

ちよっと前まで、香菜と両想いになれるなんて思っていなかった。しかし、ここま

で親切にされると、ちよつとは夢を見たくなる。

せっかくだし、護がいる時はできないような話をしたかった。

気になるのは、彼女がどうしてここまで面倒を見てくれるのか。

プラス、さっきの不自然な態度に関してだ。

とはいえ、後者はひどくデリケートな内容だろう。切り出し方が思い浮かばない。

「どうしたんですか、お兄さん」

逆に香菜の方から怪訝けげんそうに聞かれ、恭介はしゃっくりするような声を上げてしまった。

「? え、ええと……」

しどろもどろな青年の狼狽うろたえぶりです、ますます困惑した様子の香菜。

まずい。何でもいいから喋らなければ——。

恭介は無理に口を開き、

「香菜さんはどうして俺達にここまで親身になってくれるんですかっ」

突っ込むような聞き方になってしまった。

香菜も驚いたように目を瞬かせ、それから小さく苦笑する。

「保護者の方にこんな気持ちを持つのは良くないのですが……護君とお兄さんは、私

にとって、特別なんです」

「と、特別!? 特別って言いました!?!」

「はい。私より年下の保護者さんはいませんし、仲の良いお二人を見ると、素敵  
な弟が二人できたみたいで、沢山の元気をもらえるんです」

「あ、あー……」

世の中、上手くはいかないようだ。

落胆を隠しきれない恭介へ、香菜が申し訳なさそうに聞いてくる。

「やはり、こんな感じ方は失礼でしょうか?」

「そんなことありませんよ。岡本先生は理想のお姉さんですっ」

「ん……良かったです」

香菜は小さく笑うが、会話は何となく途切れてしまった。

「……………」

「……………」

しばらく無言でジュースを飲む二人。

(こ、これはいけない!)

香菜に気づまりな思いをさせては——。

とはいえ、次のネタが思い浮かばなかった。

焦る恭介は、つい尋ねてしまう。

「お、岡本先生はっ……お酒が苦手なんですかっ!!」

「え?」

言ってから反省した。こんな不躰な聞き方、考え得る限り最悪のパターンだ。少しでも取り繕いたくて、恭介は身振り手振りで付け足した。

「ほ、ほらっ……さつき、お酒の話をしたら、俺への迷惑になるって言っていましたっ」

「……苦手というか……その……」

香菜は明らかに困っていた。

しかし、気を悪くしている訳ではないようだ。むしろ、観念したように視線を落とす。

「……さつきの態度は変でしたよね。実は私、ちよつとのアルコールでも記憶が飛んで、前後のことを思い出せなくなるんです。それで周りを困らせたことがあって……」

「な、なるほど……」

「私が二十歳になった夜も、こんな風に友達がお祝いしてくれたんです。それで私、

気が大きくなって、初めてのお酒に挑戦してみたら……翌朝、みんな疲れた顔で……口を揃えて、もう外では絶対にお酒を飲むなって」

「具体的に何があったかは、教えてもらえなかったんですか？」

「怖くて聞けませんでした……」

そこから香菜は一層沈んだ声になった。

「しばらくはお酒と距離を置いたんです。でも、大学三年の時に好きな……いえ、新しいお友達ができて、一緒に飲もうと誘われて」

（今、好きな人って言いかけたよな!!）

恭介は息が詰まりかけた。とはいえ、香菜ほど綺麗で社交性もある人なら、ずっとフリーという方が不自然かもしれない。

（聞き流せ、俺っ）

恭介は膝の上で拳を握りつつ、つい声を上ずらせてしまった。

「どうになりましたっ？」

「……以降、連絡も返事もくれなくなりました」

「それは酷ひどすぎますよ！」

「ごめんなさいっ」



何を勘違いしたか、香菜が恐縮だ。

だから恭介は早口で訂正する。

「違います、相手の方ですよ！　どんな理由があつたとしても、あんまりでしようっ」  
香菜の自己評価が低い原因は、主に二度目の経験らしい。

(よし！)

今日までのお礼を、やっとなつて考えた。

「先生は俺達兄弟にとって恩人なんです。だから、お酒のせいでどんなに豹変ひょうへんしても、尊敬の気持ちは変わりません。絶対です」

「……お兄さんは酔った私を見ていないから、そんな風に言えるんですよ……」

「岡本先生だって、自分がどうなってるか、知らないじゃありませんか」

「それは……そうですね……」

彼女に意外な欠点があることは理解した。しかし、優しい面まで嘘になつてしまふはずはない。

恭介は席を立ち、冷蔵庫を開ける。

そこにはキンキンに冷えたビール缶が計五本。

昨日、成人の記念に買ってみたのだ。どれが美味しいかなんて分からないので、数

種類を集めてみたのだが、思いがけない形で役立ちそうだ。

「岡本先生、一緒に飲みましょう。それで酔いが醒めた後、俺が断言してみせます。先生は立派な人だって」

「む、無茶すぎますよ、お兄さん！」

珍しい香菜の大声だ。直後、護が寝ているのを思い出したらしく、慌てて口を押えた。

「大丈夫です。護は一度寝付いたら、ちよつとやそつとじゃ起きません」

数々の経験から、恭介は断言する。もつとも、この言い方だけでは誤解を招きかねない。

「俺、変なことなんて考えてませんっ。岡本先生には何度もご馳走してもらったし、こつちからも力になりたいんですっ」

「……………本当に……………何があつても、呆れないでくれますか？」

「当たり前です！」

青年の一途さは、香菜にも通じたらしい。

「分かり、ました……………」

とうとう了解してくれた。

後は彼女の気が変わらないうちに、実行あるのみ。

恭介は缶ビールをテーブルへ並べ、初めに『超生』とプリントされているものを開けた。

プルタブの音がプシュッと小気味よく、未知の味に対する好奇心も膨らむ。

だが——一時間と経たないうちに、恭介は自分の甘さを思い知る羽目になったのだ。

「あははあつ……キョウウくん……ビールって不思議な味ですよねえ」

「岡本先生……その呼び方はちよつとマズい気が……」

「えー？ キョウウ君はあ……『護君のお兄さん』じゃなく、一人の男の子としてえ、わたしに付き合ってくれてるんですよ？ だからあ、お互いに名前で呼び合わなくちゃ駄目なんでえすっ」

変な理屈と共に、恭介のグラスへビールを注ぐ香菜。

彼女の美貌は真つ赤に染まり、瞳も蕩けきっていた。そんな状態で、青年の隣の席に移ってきて、さつきから何度も肩をぶつけてくる。

「は、はは……」

愛想笑いをしながら、恭介は白い泡に口を付けた。

彼もすでに酔いが回っており、鼓動が速い。顔も熱い。

（俺、早まったのかも……）

決して、憧れの人に幻滅したわけではない。

だが色っぽさを増した香菜が、ファーストネームを呼んでくる危なっかしきときたら。

舌足らずな声は耳朶みみたぶをなぞり、体温までが質感を持つて頬を撫でてくるみたい。

これはいかんと焦っているうちに、香菜はクニヤツとしなだれかかり、バストまで腕へ押し付けてきた。

「うううっ……」

距離を取っている時でさえ、若い純情を圧倒する特大の膨らみなのだ。上半身の重みでブラのカップごとひしゃげれば、エロティックな感触がこれでもかと伝わってくる。

底なしに柔らかい。それでいて、張りりと弾力もあった。

さらに香菜がちよっと身をくねらせるだけで、プルンツと弾むように、二の腕から滑りかける。

実のところ、恭介のペニスは勃起ぼっきして、ズボンの圧迫で竿ねが捻じれかけている。

丸っこい亀頭もひしゃげてしまい、ずっと痺れ通しだ。

こんな状態が続いたら、肉幹が根元から折れるか、服を着たまま射精するか。

(冗談じゃない！)

たとえ香菜が翌朝には忘れられるとしても、彼女の前で粗相なんて絶対に嫌だ。

せめて変化を気取られないように、恭介は腹をテーブルにくつつける。

それなのに――。

「ううん……秋なのに夏ですわねえ。暑くなっちゃいましたあ」

フラッと身を離れた香菜が、セーターの裾を掴んだのだ。

「待ってください！」

恭介は反射的に香菜の手を押さえた。

捕まえた五本の指と手の甲は、意外なほど小さくて軽やかだ。その感触にドキリとなつた次の瞬間、香菜が悪戯つぼく笑う。

「キョウウくん？　そこ、どおしちやつたんですかあ？」

彼女の目は、恭介のズボンへ注がれていた。青年が隠したかった股間部は、姿勢が変わつたせいで、丸見えとなつてしまったのだ。

「キョウウ君つて、酔うとエッチになつちやうんですわねえ。わたしはビックリですよ」

「お、かもとっ……先生！ 俺……イキそうです……出そう、ですっ……！ このま  
まじやつ……先生の中で……くっ!？」

切れ切れに訴えても、香菜はペースを落とさなかった。むしろ頷く動きで、亀頭を  
上下に捻る。

「うんっ、んっ、出ひへええふっ……！ おひんひんの先つちよから……せええきっ  
……ピュッピュしへくださあい！」

言い返す間にも、亀頭で己の内頬を掘削している彼女。どうやら口腔粘膜こうくうが心地い  
らしい。

「出してっ、いいんですかっ!! くぐっ、本当につ!! 口に……いつ!!」

念を押す間にも、恭介の歯止めは壊れていく。すでに男根の中は精子で満ちて、食  
い止めていられるのが不思議なほどだ。尿道内の神経も、一本一本が毛羽立つみたい。  
出るっ、もう出るっ! 無理だ、出るっ!

「んんうおふっ! だ、出ひへえええうううんっ!」

香菜も昇天間近のように声を裏返らせる。のみならず、音を立てて、下品なバキュ  
ームを開始した。

「ずずずずず! ずぢゅうううずぞぞおおおおつ!」

「お、おとおおっ!!」

恭介は尿道を真空にされそうだと。精液もストローを使われたかの如く、残った距離を一気に駆け上る。

「う、あ、い、イクッ、出るうううっ!!」

粘膜の道が踏み荒らされて、鈴口も無理やり拡張された。

ビュクビュクビュクッと思い人に精をまき散らす解放感、恭介が初めて味わう強烈さだった。そのくせ、舌や口腔粘膜に捕らわれ続け、被虐的な閉塞感もある。

とはいえ射精の力強さは、香菜にも予想外だったらしい。

「んぶふうううっ!!」

一発目で喉を塞がれて、全身を硬直だ。

そこへ二発目が飛び込み、逃げるように顔を引く。

「ん、ぷふああうっ!!」

「お、おっ!」

グロテスクな肉幹は糸を引きながら吐き出され、恭介の解放感も混じりつけなしのものへ昇華された。

そこで三発目がドブブッ! ベチャッ!

「う……うえあつ！ えうつ、おつ……こほつ！ んつ、けほつけほつつ！」  
ゲル状の白濁は、咽<sup>む</sup>せる香菜の高い鼻筋から臉<sup>まぶた</sup>へ、ベツタリとへばりついた。  
その一部始終を、恭介は見る。

——ゾクリ。

やられっぱなしだった彼の胸に、マゾヒズムとは別の昂<sup>たかぶ</sup>りが割り込んできた。

この際、自分から香菜へ抱きつき、押し倒して——。

もつとも、情欲が固まりきるより早く、咳の鎮まった香菜が、照れたように見上げ  
てくる。

「あはっ……最後に失敗しちゃいましたあ。ちゃんと飲めると思ったんですけどねえ

……」

それで恭介に蟠<sup>わだかま</sup>る衝動も霧散する。

「でも俺……すぐく気持ちよかったです……」

「あはっ、良かったでえす。でもお、夜はまだまだこれからですよお？」

「え？」

含み笑いを浮かべながら香菜が立ち上がった。途端に汚濁の絡む美貌も、恭介へ接  
近だ。





「う、あ……」

恭介は後ずさりそうになる。そのくせ逸物の方は、スペルマの残滓ざんしを浮かせつつ、派手に弾んだ。サイズも射精時のままだ。即座に第二ラウンドへもつれ込めたくまそうに逞しい。

そんな彼へ、香菜もごく自然に指示を出してくる。

「次は床へ寝てくださいね？」

「はい？」

「ゴロンと寝ころんでくださいあい」

彼女はニコニコしながら、ティッシュで手と口を拭き、残っていたビールを缶入りのままで飲み干した。

「んくっんくっんくっ……ふはあっ！ 精液もビールも苦いですねえ」

「……」

恭介がリアクションに困っていると、香菜は腰へ手を当て、「めっ」と軽く睨にらんできた。

「ちゃんと寝てくださいよお。わたしが満足するまで付き合うつて、キョウ君は言うてくれたじゃないですかあ」

そんな記憶はない。

とはいえ、恭介も快感に負けた身である。性欲も後ろめたさと張り合うまでに肥大化し、もう目を逸らせなかった。

「……分かりました。岡も……いえ、香菜さんっ」

恭介は椅子のクッションを床へ置いた。それを枕代わりに、股間をさらけ出したまま、仰向けとなる。

急所を無防備に晒す<sup>さら</sup>格好は、ひどく落ち着かなかった。まして、片思いの相手から見下ろされているとあつては。

「うんうん」

香菜は満足そうに頷き、指先を自分のロングスカートのホックへ掛ける。留め具を外したら、ファスナーまであつさり開いてしまった。

手放されたスカートは、床までスルリと滑り落ちる。

下から出てきたのは、空色のショーツとガーターベルトだ。

ショーツは上半分がセーターで隠れているものの、薄いレース地が多かった。

それが愛液を吸い、陰唇まで見えてしまいそう。陰毛に至っては、黒い茂みがあからさまに透けていた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの  
桃色バスツアー

日常に密着したエロス  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!

小説家になるこの男性向けサイト  
「ノックタリッシュノベルズ」  
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイズ?

あなたはどの

あとみっく文庫

呪祖喰らい師

あの人気作品の  
外伝作品もあり!  
電子書籍でしか読めない電子小説

フリーダム120%!?  
ジャンルにとらわれない  
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界の  
ドキドキ  
妹は  
イケてるわ

ドキドキキアラフな  
ハイレム系  
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫